

Alexander von Humboldt

中国・四国会員による

寄稿集



2015

寄稿集発刊にあたり

大 森 晋 爾

私のドイツでの先生は Feodor Lynen です。1964年ノーベル医学・生理学賞を受賞されました。また Max Planck 財団と Alexander von Humboldt 財団の総裁をされておりました。私は両財団にお世話になったので両財団やドイツに何かお役に立てばと何時も思っています。例えば毎年の春京都で開催されていた西日本 Humboldt 会には中国・四国からのほぼ唯一の参加者でした。

ある時私はこの会議の席で、中国・四国 Humboldt 支部会は事業をしていないのに毎年支部支援金（10万円）が入金されているが何に使われているのか、と発言しました。その年以後この支援金は還元されなくなりました。多分この発言が原因になったのか不幸にも私に Humboldt 会中国・四国支部の支部長のお鉢が廻ってきました。2013年京都リサーチ・パークにおいて日本 Humboldt 協会の創立総会が開催されました。この時 Humboldt 会中国・四国支部会員数名に集まっておりました。そこで今後本会がどのような活動を為すべきかをお謀りしました。しかし実際に実行可能な活動計画は立ちませんでした。（また私の入院治療のため支部長としての活動が中断しました。）昨年 Humboldt 会中国・四国支部会員各位にお手紙を送付させて頂きました。その内容は皆様より自己紹介を含め文章を戴き、それを編集して冊子としこれを皆様に配布しようというものです。

会員各位は何かとご多忙であり、皆様にとって作文はお手数をおかけすることと思われましたがこの度数人の方々より寄稿いただくことが出来ました。ご理解・ご協力いただき感謝します。ここに支部会員文集を発刊することが出来るようになりました。以上発刊の経緯を書かせてもらいました。

今後もこの雑誌の発刊の目的をご理解下さり皆様の本会へのお考え、ドイツでの思い出、専門分野の紹介、ドイツと日本、ドイツ製品、ドイツ人と日本人、Humboldt 留学生の支援・促進、この地方部会の発展 等に関する原稿を戴ければ有り難いと思います。

最後に日本 Humboldt 協会事務局の関 映子様、本誌にご投稿下さった方々のご協力にもう一度心より感謝いたします。

Inhalt

ハイデルベルグ大学整形外科の思い出
武智秀夫・3

ゲーテ街道を巡る気まま旅
大作 勝・5

雑感 ドイツ留学とドイツとの交流
木地実夫・10

ドイツの恩師ご夫妻への想い
河野 宏・12

「ドイツ留学の思い出」－ドイツルネッサンス画家の巨匠達を訪ねて－
梶原博毅・16

第2次世界大戦を超えたドイツと日本の師弟愛
大森晋爾・20

Deutsche Landkarte・23

ハイデルベルグ大学整形外科の思い出

武 智 秀 夫

私が Humboldtianer としてハイデルベルグ大学整形外科に留学してから半世紀経過した。古い話になるが、そのことを記してみよう。

.....

ハイデルベルグ大学は1386年に古典4学部（神学、哲学、法学、医学）で創設された。アルトハイデルベルグ（旧市街）にある Aula の天井に4学部を象徴した絵がある。

.....

ハイデルベルグ最古の病院は15世紀シュリアバッハ（旧市街の端にある Karlstor から7～8 Km ネッカー川をさかのぼった左岸の地名）に建てられたハンゼン病の施設であった。この建物は1880年5月に消失し、礼拝堂のみ残った。

この礼拝堂の写真はハイデルベルグ大学医学部の歴史の冒頭に出てくる由緒あるものようだ。礼拝堂の周辺には Gutleuchtweg, Gutleuchthof といった町名がある。漢字にすると光明であろうか。

.....

ハイデルベルグ大学整形外科（Orthopädische Anstalt der Universität Heidelberg）はシュリアバッハにある。当時病床450、一般病棟の他に脊髄損傷、Dysmelie（先天性四肢欠損）、小児、婦人の病棟があった。Dysmelie はサリドマイドの為にその頃ドイツでは多く見られ、そのセンターがあった。

.....

その他にかなりの規模の義肢・装具の Werkstatt（工房）が2つ、Orthopädische Schuhmacherei（整形外科靴）の工房が1つあった。靴工房には靴の木型を作る木工旋盤もあった。1つの義肢・装具工房ではハイデルベルグ義手がつくられていた。

.....

現在、体外力源義手は全て筋電義手である。ハイデルベルグ義手はハイデルベルグ大学整形外科の技師ヘフナーにより1952年考えられ、リンデマン教授により普及された。広く Dysmelie に用いられたもだ。圧縮炭酸ガスを力源とし、駆動力はふいごで弁で制御するものである。私が留学していた頃は盛んに用いられていた。

.....

私の留学目的の一つはリハビリテーション医学であり義肢・装具も含まれていた。義肢・装具は整形外科医により処方・判定され、製作は義肢・装具士が行う。私は主に義足について研修した。

当時日本の義肢・装具の一般レベルは欧米に4～50年遅れていたのである。

.....

留学の終わりにフンボルト財団にレポートを提出し自分の研修結果を報告した。レポートの終わりにドイツで使われている義足構成器である Balaceapparat と Aufbauapparat のことを書き、日本にそのようなものがないことを記して、財団から戴けないかとお願ひした。当時日本ではアラメント・カップリングという簡単な義足調整器が使われていた。そして 1, 2ヶ所にアメリカ製の adjustable knee と alignment duplication jig という大腿義足構成器があった程度であった。

.....

帰国後財団から2つの装置を岡山大学に贈呈するので貴方の研究に使いなさいという連絡があり、送って頂き大変役立った。

.....

私の恩師リンデマン教授はハイデルベルグ大学の学長をされた程の傑物であったが、私の留学中急逝された。

.....

そのほか朝早くから手術の助手も沢山した記憶がある。リンデマン教授が新築された手術棟の入り口にゲーテの言葉がかかげられていた。その言葉はリンデマン教授の人柄・見識をよく表したものだ。私は今でも はっきり憶えている。

Idee und Erfahrung werden in der Mitte nie zusammentreffen, zu vereinigen sind sie nur durch Kunst und Tat.

.....

私は留学中シュリアバッハに下宿した。シュリアバッハの対岸はチーゲルハウゼンという集落である。下宿から坂を下ると先に書いた礼拝堂が見える。橋を渡るとチーゲルハウゼンで色々な店や、レストラン、ホテルがある。ある時、橋を渡った突き当たりの家に額があり「この家に1875年夏ヨハネス・ブラームスが滞在した」と書いてあるのに気づいた。その後ブラームスの伝記を読むとこの年チーゲルハウゼンで交響曲一番の作曲に集中したと書いてあった。私はブラームスの音楽が大好きである。(den 5.Dec. 2014)

独立行政法人 労働者健康福祉機構
吉備高原リハビリテーションセンター名誉医院長
〒703-8273 岡山市中区門田文化町2-9-70

ゲーテ街道を巡る気まま旅

大 作 勝

ここに、2012年5月旧東ドイツ地域の街々を巡る手作りの気ままな個人旅行をはたしたことについて記す。今回の旅は諸般の事情でハイデルベルク留学時代に訪問がいささか困難であった地方のそれである。この旅は留学時代からの念願であった。もっとも東西ドイツ時代に1度だけ当該地域を素通りしたことはあるが。

5/14-15 (月-火) (広島⇒羽田⇒フランクフルト⇒ハイデルベルク⇒アイゼナッハ)

広島から羽田を経て ANA は早朝フランクフルト空港に着いた。空港駅からフランクフルト中央駅までは DB で移動する。寝ぼけ眼のマグカップのコーヒーは小カップでも飲みきれぬ量であった。中央駅から IC でダルムシュタットへ。ここからは鈍行レギオナルを使いハイデルベルク中央駅に到着する。いまだ早い朝のハイデルベルクは小雨に煙っている。さらに非常に寒い。旅人たちの寒さ対策が十分ではない。防寒具を買い求めるためいくつかの店を訪れたが希望のものはない。この地は2001年秋の指導教授の退職記念パーティーに出席以来、実に11年ぶりである。中央駅からビスマルクプラッツを経てハウプトシュトラッセを通り、しばらく古い大学キャンパスとアルテブリュッケ近くを散策する。大学のメンザが開くのを待って昼食とする。30年ぶりのメンザである。ただしメンザ内の雰囲気は留学時代とすっかり変わっている。外国からの留学生が増えている。その後小雨の中をとぼとぼ歩きハイデルベルク中央駅から本日の宿泊地アイゼナッハを目指す。途中トラブルに見舞われ電車は定刻より2時間近く遅れ、アイゼナッハに着いたのは夕方となった。ホテルにチェックイン後、駅前のインビスでそそくさと夕食をなす。

5/16 (水) (アイゼナッハ)

今日もとにかく寒い。駅前からバスで山の上のヴァルトブルク城を訪れる。ここはルッターが聖書をギリシャ語からドイツ語に翻訳したところとして知られている。それ故かドイツ人にとっては非常に重要な町らしい。お城の内外を見学後眼下の街に戻る。町はさほど大きくはないが、きちんと整備されている。シュニツェルで昼食を済ませマルクト広場で養蜂家から「森の蜂蜜」を求める。瓶には手作りのラベルが貼られている。その後ルッターの家、バッハの家を訪れ、バッハの作品と演奏を楽しむ。



アイゼナッハ、ヴァルトブルク城

5/17 (木) (アイゼナッハ⇒エアフルト⇒ヴァイマール)

朝から大分暖かくなってきた。エアフルトまでは約30分の旅。駅にてトランクを預け、街に出る。ナポレオンとゲーテが会ったといわれるエアフルトではクレーマー橋を経て小さな丘の上にある立派な大聖堂を訪れ、ついで市庁舎の内部をちらっと見学後、次の訪問地かつ今日の宿のあるヴァイマールに移動する。ヴァイマールのDB 駅は町はずれで少し小高い所にある。宿となるペンションは駅と旧市内との中間になる。もちろん旧市内へは歩いていける距離である。建物はかなり年季が入っている。木の床は大きく傾いている。荷物を置き街に出る。街中で昼食代わりにブラートブルストをかじる。小さな町であるが落ち着いた街である。劇場広場にはゲーテとシラーの銅像が建っている。この地ではゲーテの家とシラーの家を訪ねる。



ヴァイマール、ゲーテとシラーの銅像

5/18 (金) (ヴァイマール⇒ハレ⇒ヴァイマール)

当初の旅の予定を急きょ変更し、ヴァイマールからレギオナルで約1時間の距離にあるハレを訪れる。マルクト広場で今日もブラートブルストを食す。その後ヘンデルの家、モーリッツブルク城、マルチンルッター大学（1694年創立）を訪問する。ヘンデルの家の内部には数多くの資料が整備して展示されている。こじんまりしているが訪れる価値多し。お昼は城近くのレストランで旬のもの「白アスパラガス」などを食す。やわらかくきわめて美味であった。ドイツ人がこの食材を待ち遠しいのもうなずける。

5/19 (土) (ヴァイマール⇒イエナ⇒ライプツィヒ)

朝から快晴。非常に暖かくなり、半袖で十分となる。ヴァイマールからレギオナルに乗る。約15分の旅。イエナにはイエナパライディース駅とイエナ西駅がある。ヴァイマールからは丘の上のパライディース駅に着く。イエナではシラーイエナ大学（1558年創立）を訪問する。大学は全く新しい建物となっている。古い建物も残っているらしいが、訪問できず。ついでシラーのガルテンハウスを訪ねる。小さな庭であるが静寂で大小の花々が咲き乱れ極めて美しい。お昼は旧市内の小さなレストランのテラスでとった。地元の人が勧



イエナ、シラーのガルテンハウス

めてくれた、この地方の名物となっている「クネーデル」の類を食す。早い午後、西駅からライプツィヒに移動する。ホテルは駅から徒歩数分のところにある。荷物を預け、ライプツィヒ3日券を買い求め、街に出る。旧市内のニコライ教会でオルガン演奏を聞く。オルガンは限りなく教会にかぎる。その後ライプツィヒ大学（1409年創立）を訪れる。ドイツではハイデルベルク（1386年創立）、ケルン（1388年創立）に次いで3番目に古い大学で、ゲーテや森鷗外らが学んでいる。今は超近代的な建物も建っている。宿に帰る。宿は駅前の古い建物—おそらく以前は倉庫だったのかもしれぬ—を改造したホテルである。床はここも恐ろしく大きく傾いている、じっと見ていると平衡感覚が失われ頭が少しおかしくなる。

5/20 (日) (ライプツィヒ)

終日ライプツィヒにて過ごす。旧市庁舎、バッハが演奏活動をしていたといわれるトーマス教会、その隣のバッハ博物館を訪ねる。博物館では音楽を聴く。演奏は若手のもので今一ではあったが、バッハについての解説が機知に富んでいて実に面白い。子沢山のバッハについてのエピソードのいくつか。

5/21 (月) (ライプツィヒ⇒ヴィッテンベルク⇒ライプツィヒ)

ライプツィヒからDBで約1時間のところにあるルッターシュタット・ヴィッテンベルクに出かける。小さな町であるが、世界遺産の建物がいくつかある。移動に使った切符は州内のみで有効、かつ利用時間帯制限付きの割引切符（ザクセンチケット）だとか、駅構内にあるDBの案内所でおばさんが懇切に教えてくれた。ヴィッテンベルクではルターの家と城教会を訪ねる。帰り道駅構内の小さな店で果物を買ひ、列車内で食す。

5/22 (火) (ライプツィヒ⇒ドレスデン⇒マイセン⇒ドレスデン)

ライプツィヒからドレスデンに移動する。珍しくDBが混んでいる、がしかしICEで約1時間の距離、あっという間である。ひとまずトランクを駅構内の大型ロッカーに置いてSバーンでマイセンまで出かける。約30分の旅である。白磁陶器で世界的に有名なマイセンはエルベ川沿いに広がる小さな町である。街中の建物の壁にはエルベ川の氾濫で何回か浸かった、とその年と水の高さが横線で示してある。小高い丘の上の大聖堂でオルガン演奏を聴く。陶磁器類に全く興味がないわけでもないが、早い午後ドレスデンに帰る。宿に荷物を置き、再建されたフラウエン教会付近の旧市内を散策する。ドレスデンは旧東ドイツ時代に一度訪れたことがあるので26年ぶりである。当時の高層アパートのいくつかはある



マイセン、丘の上の大聖堂

大手チェーンのホテルとなっている。あの頃は爆撃で破壊された建物の残骸であろう瓦礫があちこちにうず高く積まれていた。そして中央駅から旧市内が見通せたが、今は新しく大きな建物が建ちショッピングセンターができ当時の面影は全くない。

5/23 (水) (ドレスデン)

終日ドレスデンにて過ごす。ツヴィンガー宮殿と絵画館を訪れる。その後旧市内を当てもなく散策、広場を囲む建物の壁にはやや色あせた旧東ドイツ時代の名残が見える。ドレスデン中央駅まででかけ、翌日のベルリン行きの列車時刻を確認する。

5/24 (木) (ドレスデン⇒ベルリン)

ドレスデンからベルリンに移動する。約2時間の旅。機関車が引っ張るタイプの国際列車である。列車は若干年季が入ったコンパートメントで、隣国チェコプラハから今は隣国となっているポーランドのシチェチンまで行くという。車窓には旧東ドイツ地域の街々の風景が流れていく。ところどころに旧時代の放置された建物や工場群がある。ベルリン中央駅から電車を乗り継ぎ、宿へ。ペンションにてトランクを預け、鍵束をもらう。ここのエレベータは相当の年月使われている。電車で中央駅まで行き、連邦議会議事堂、ブランデンブルク門、ウンターデンリンデン、フンボルト大学（1810年創立）、ベルリン大聖堂を経て、アレキサンダープラッツまで歩く。1981年訪問時には真っ黒であった議会議事堂は大きく変貌、西側からしか見ることのできなかつたブランデンブルク門の下を感慨深くくぐる。夕焼けに映えるフンボルト大学の内部を少しばかり見学する。

5/25 (金) (ベルリン)

午前中博物館の島（ペルガモン、エジプト博物館）に遊ぶ、両博物館ともにその規模の壮大さと展示の多彩さに感嘆する。「博物館の島」の訪問、長年の念願がやっとかなう。午後ポツダム広場から絵画館に行くもお目当てのフェルメール「真珠の首飾りの女」は東京に行っているという。絵画館前のレストランで小休憩の後、ペンションへの帰り道、31年前に見たカイザーヴィルヘルム教会を探すも見つからず、よくよく見ると建物は修理中で全体にカバーがかかっていた。

5/26 (土) (ベルリン)

朝食後ペンションを出て、地下鉄でシャルロッテンブルク宮殿へ、その後ベルリンフィル、東駅近くのベルリンの壁ほかを訪れる。壁そのものは統一前に訪れたときとずいぶんと趣が異なる。1981年訪問当時はそれなりに緊張しながら見たように記憶している。

5/27 (日) (ベルリン⇒ポツダム⇒ベルリン)

電車でポツダムに行く。ベルリンから約30分。森を抜けるとポツダムである。ポツダム中

中央からは旧市内を目指してひたすら歩く。サンソーシ宮殿とポツダム大学（1991年創立）を訪れる。サンソーシ宮殿に加えて新宮殿もどこもかしこもひととひと。園内はかなり広い。庭の眺望がすばらしい。いくつかの彫像も。そして歩く、あるく。両宮殿への入館をあきらめて、歩き疲れたままバスで中央駅に、そのまま電車で宿に帰る。翌日帰国のためペンションの支払いを済ませる。



ポツダム、新宮殿

5/28-29（月-火）（ベルリン⇒パリ⇒成田⇒広島）

快晴となる、ペンションを出てシャトルバスでテゲル空港へ。ベルリンからパリシャルルドゴール空港へ、パリから成田空港へと機中の旅。成田から無事広島に帰る。

旅の初めからこれが最後のドイツ旅行となるかも知れぬという思いがあった。今回の旅はハイデルベルクを除くと旧東ドイツ地域の大中小十一都市をめぐったことになる。統一後ほぼ20年を経ているが、まだまだ西側とは街々の雰囲気が大きく異なっているように感じた。同時にこの旅で実に多くのことを学んだ。ここに記したことと旅行当時の記憶との差異は若干曖昧である。したがって記述内容には少しばかりの間違い・勘違いがあるかも知れない。そのことがあればどうかお許し願いたい。また文章中、時制を無視して現在形で書いている個所が多いこともお断わりしておく。文中の下線付地名は宿泊地を示す。

雑感 ドイツ留学とドイツとの交流

木 地 実 夫

ドイツ留学

初めに自己紹介をさせていただきます。1961年大阪大学理学部化学科修士課程を修了して、東洋レーヨン（現 東レ）に入社しました。研究所に勤務した後、1966年 京都大学工学部合成化学科の助手として採用されました。有機合成化学、高分子合成の研究に従事していました。1969年フンボルト財団の奨学生に応募して、幸運にも採用され、1971年の11月から翌年の8月まで TH Darmstadt の高分子化学研究所（Institut für Makromolekulare Chemie）で研究に従事することになりました。当時は、我が国の若手研究者の多くは *post-doc* として米国に行って研鑽を積んだものでした。この研究所は 20 世紀初頭セルロース研究所として大学につくられたものでした。重厚な青銅製の扉には、植物の採取や、紙、パルプなどを作る絵が描かれていました。師事した教授は R.C.Schulz 先生でした。幾つかのテーマが与えられましたが、ジアセチレン化合物（ $-C \equiv C - C \equiv C -$ 結合をもつ化合物の結晶）の固相重合を選びました。この研究はマインツ大学との共同研究のテーマでした。このプロジェクトの共同研究者であるマインツ大学の G.Wegner 教授と議論して、ジアセチレンをトリアセチレン（ $-C \equiv C - C \equiv C - C \equiv C -$ ）に拡張し、どのような重合が起こるかを調べることにしました。苦勞してトリアセチレンの結晶を作って重合しましたが、ジアセチレンタイプの重合を起こすことがわかりました。もう一つのアセチレン結合は単なる置換基として側鎖についているだけでした。帰国するまでに論文として纏めることができました。

当時、フンボルト奨学生には、楽しい、3 週間程のドイツ国内を廻る *Studienreise* というバス旅行がありました。この時代は、まだ2つのドイツに別れていた時代でした。旅行計画に陸路で西ベルリンへ行くことになっていました。私は、東ドイツが入っていない公用旅券を持っていましたので、東ドイツを経由して西ベルリンへ行けるかどうかを、ハンブルク総領事館に問い合わせたことがありました。結局、東ドイツが入っていないパスポートでも陸路で西ベルリンへ行けることになり、無事西ベルリンへ行けることができました。ベルリンでは、ベルリンの壁の前に木製の展望台があって、東ベルリンを覗くことが出来ました。また、観光バスで東ベルリンへも入ることができました。ブランデンブルグ門辺りは走っている車もなく、ベンチで数人居るぐらいでした。今、この辺りは観光客で賑わっているのを見ると隔世の感がします。ラジオで当時のブランド首相の声を聞いたことがあります。Bundesrepublik Deutschland, DDR といっていた声が未だに耳に残っています。

Schulz 先生は私が留学する前年まで、マインツ大学におられました。この関係もあってか、私達家族の住処として、マインツ市のドームに近い市の中心地にアパートを借りて下さいま

した。毎日の生活に大変便利な場所でした。それで、ドイツ鉄道を利用してダルムシュタットの駅まで行き、Alexanderstr.にある研究所へは市電で行っていました。時々研究所で遅くなった時など、駅の立ち飲みカウンターでビールを飲んで帰宅したこともありました。懐かしい思い出の一つです。

私の通っていた研究所は、あの重厚な青銅製の扉はそのまま、いまは心理学研究所になっています。若い女学生がこの扉から颯爽とでてきます。昔と違う雰囲気になっています。

わたくしの師事した Schulz 先生は、奥様に先立たれ晩年は大変淋しい思いをされておられたようでした。先生も数年前に逝去されました。また、アパートの大家さんも亡くなられ、留学時代の思い出もだんだん遠くなってゆく感じです。

1989年、文部省の短期在外研究員として、再びドイツとイタリアへ行く機会がありました。ドイツでは新設されたマックスプランク研究所の高分子研究所で一ヶ月滞在しました。滞在したのは G. Wegner 教授の研究室でした。研究所と壁一つ隔てた宿舎でおりました。時々、夜に行われた講演会は、昔のよき時代を思い出させるような優雅な雰囲気が感じられました。ベルリンの壁が崩壊したのも私の滞在中の出来事でした。

この後で、イタリアのミラノ大学へ移り、Farina 教授の研究室でお世話になりました。ミラノ滞在中に当時のソ連のゴルバチョフ大統領がバチカンを訪れ、米ソ首脳会談がマルタ島で行われました。短い滞在でしたが、時代の移り変わりをひしひしと感じた次第でした。

ドイツとの交流

昭和64年(1989年)、鳥取市で「鳥取世界おもちゃ博覧会」が開催されました。この時ハーナウ市(グリム兄弟の生まれたところ)にあるヘッセン人形博物館に、世界最古の人形の特別展を依頼し、これが実現しました。これを機会に鳥取市とハーナウ市との交流が始まり、平成17年に市民レベルの「鳥取・ハーナウ友好親善協会」が設立されました。また、市の方針として、ドイツから国際交流員として、市役所職員として受け入れております。市の仕事のほかに市民向けのドイツ語講習会も開いております。節々のイベントがある年にはお互いに交流団を派遣しています。私としましては、だんだんドイツへ行く機会が少なくなってきています。出来る限り、歓迎会などに出席してドイツとの交流を暖めています。

縁あって、私は「DAAD 友の会」に入会しています。毎年、東京で総会やクリスマス会をやっているようです。このような会には出られません。が、節目節目のイベントには極力出るように努めています。フンボルト会も会員が集まれるようなイベントを企画していただければ大変有り難く思います。

鳥取大学名誉教授
〒689-0202 鳥取市美萩野1-59

ドイツの恩師ご夫妻への想い

河野 宏

高校生の頃から一度ドイツへ留学したいと思っていた。多分、よく分からないまま読んでいたドイツ文学、感動しながら聴いたドイツ音楽による影響だと思う。大学を卒業後、内科学を勉強するために岡山大学医学部第一内科教室に入局し、肝疾患の生化学的な研究を行うようになってから具体的にドイツ留学を目指すようになった。フンボルト財団による給費研究生の条件のよいことが分かり、詳細は不明のまま出願したが採用されなかった。その後、親しくなったドイツ総領事館の領事から教わって、とにかくドイツでの引き受け先がしっかり決まっていないと、日本の教授の推薦だけでは駄目なことが分かった。

ある時、ドイツの権威ある医学雑誌 *Klinische Wochenschrift* に、私が行っている研究と同系統の研究報告が発表されていた。その論文を書いていたのはドイツ（当時は西ドイツ）のマルブルク大学内科の研究者で、その主任教授が G.A.Martini さんであった。私は当時、学位論文をドイツ語で完成させた直後だったので、その別冊を同封し、フンボルト財団の給費研究生として留学したいので、ぜひ受け入れて頂きたい由、切々と手紙を書いた。嬉しいことに、マルティーニ教授からの返事は、僅か10日余りで届いた。当時、ドイツへの航空郵便はほぼ1週間を要していたので、私の手紙を受け取ってすぐに返事を書いて下さったことになり、大変感動しながら読ませてもらった。

その手紙によると、私を喜んで研究室に引き受けてくださること、それに関する推薦状は直接フンボルト財団に送るとのことが記載してあった。

そこで所定の手続きをし、マルティーニ先生の手紙も添えて願書を神戸のドイツ総領事館に送った。それから間もなく、1966年の5月の下旬にフンボルト財団からの採用通知が届いて念願のドイツ行きが決まった。

1966年9月から、ミュンヘンの西30キロにある村、Grafrath の Goethe-Institut でのドイツ語研修を2か月間受講することになった。その前にマルティーニ教授に挨拶をするために8月の下旬、フランクフルト空港に到着後、マルブルク大学を訪れた。予め手紙でアポイントをとっていたので、大学に到着して内科の門衛所に来意を継げると、すぐに教授秘書に連絡し、教授秘書のところへ案内してくれた。教授室のドアをノックすると、中年の女性秘書がドアを開けて「Dr. 河野、よくいらっしゃいました」と、にこやかに挨拶してくれたので、一挙に緊張がとれた感じであった。直ちに大きな教授室に案内され、初めてのマルティーニ先生にお会いすることができた。先生は今年10月に日本で開催される世界消化器病学会に出席予定であることなど、しばらく話をしてから、肝臓専門の二人の Oberarzt（日本でいう準教授、講師クラスの上級医、すでに教授資格を持っていた）、ついで11月から一緒に研究をする予定の二人の助手、ボーデ君とベゲベル君を呼んで紹介して下さった。最初のマルティーニ先生との対応は思った以上にスムーズに運び、ほっとしたものである。

2か月のドイツ語研修を終え、11月1日に再び着任の挨拶に教授室を訪ねた。この時、最初に言われたことが理解できず、聞きなおしたが、恐らく、私がどのくらいドイツ語が進歩したか、少し難しい表現で話されたものと思う。

翌日、直接の上司となった **Oberarzt** であるシュトロマイヤー先生を教授室に訪ね、これからの研究の打ち合わせをしたが、事前にマルティーニ先生から私の希望も聞いておられたようで、その時は具体的な研究の話はなかったが、今後の方向性についてだけ打ち合わせた。それから間もなく、アルコール性肝障害についての生化学的な研究に取り掛かることになるが、マルティーニ先生が研究面で色々お心遣いをして下さっていたことに、あとで気がつくことになる。

家族が11月半ばにマールブルクに到着したが、家族に対してもマルティーニ先生の奥さんが大変気を使って下さったことも有難かった。私たちの住んでいた家は、マールブルクから3キロ程離れた Cölbe という村の庭師の家の3階であった。この家は大学の **Auslandsamt** のお世話でドイツへ出発する前に、詳細が分からないまま決めていたものであるが、私の前に3人の日本人が継続して住んでいたし、その中にはドイツ文学者の小塩節先生、坂井英八郎先生のような著名人も住んでいたので、ある程度安心はしていた。ただ実際に住んでみると、あまり良い住まいとはいえなかったが、家賃は安いし、家主も親切だったので、こんなものだろうと思って生活していた。しかし、家族が来て間もなく、私が大学に行っている間にマルティーニ教授夫人が訪ねてこられ、家内とも話されて、もっと良い住まいを考えて下さる話しがでたらしい。結局、先生とも相談され、大学の医師などの職員が住んでいる州立のアパートを世話を頂き、翌年、1967年の7月から立派な住居をえることができた。

私は研究の傍ら、肝臓・感染症病棟にも所属し、マルティーニ先生の回診に立ち会ったり、学生の講義を聴講させてもらった。その中で感心したのは先生の診察が非常に丁寧に、しかも厳しく行われることである。ある時、学生の臨床講義で60代の女性が患者として紹介され、詳しい問診の後、診察に移ったのだが、驚いたことにいくら高齢者とはいえ、女性を真っ裸にして頭から足の先まで時間をかけて診察されたことである。その観察方法はほかの場面でも経験することになる。

教室員の家族にもよく気を配られていたが、私の二人の子供にもよくして下さり、機会をとらえては教室員の家族の集まりなどに呼んで頂いた。クリスマスには私たち夫婦共々、お宅に招待して頂いたこともあり、また、プレゼントを持って、わざわざ私たちの家に先生ご夫妻で来て下さったこともあった。もちろん、子供たちも **Onkel** と **Tante Martini** の訪問を喜んだが、私たちも予期しない来訪に大変感激したものである。

2年間の研究も終わりの頃、1968年7月にチェコのプラハで世界消化器病学会と国際肝臓学会があり、ぜひ発表するようにと勧められ、2年間の成果を英語で発表したが、発表する文章も丁寧に訂正して頂いた。また、その際、列車で同道させてもらい、大変お世話になった。なお余談になるが、この学会には恩師の小坂淳夫教授も出席され、シンポジウムに参加されたが、終了後、ホテルの一室で親しく、今後のことについてなど歓談できたのは有難いことであった。旧ソ連がプラハに侵攻する1か月前のことである。

帰国の際も、多忙な時間をさいて教室の幹部、同僚とともに、私たち夫婦を由緒あるレストランに招待し、送別会を催して下さったのも嬉しいことであった。その頃、教室に残って助手として仕事を続けたいか、という有難い打診もあったが、小坂淳夫先生との約束もあり、子供も翌年春から小学校に入る時だったのでお断りせざるをえなかった。

その後、私は10年経った1978年に再度、フンボルト財団とマルティーニ先生の許可がおりて、3カ月間ではあったが、再びマールブルク大学内科教室に招待して頂き、研究の交流ができた。その時は、以前お世話になった2人の Oberarzt と一人の同僚は、それぞれチュービンゲン大学内科、デュッセルドルフ大学内科、エッセン大学消化器内科の主任教授として栄転しており、3人からそれぞれの大学へ招待して頂き、旧交を温めることもできた。

東西ドイツ統一1年後の1991年、かつて同僚であり、ベルリン自由大学消化器内科の主任教授になっていたリーケン君から夫婦で招待され、ベルリンおよび彼の別荘のある Lanze という田舎で優雅なひと時を過ごすことができたが、マルティーニ先生ご夫妻も同席しておられ、ハウスコンツェルトがあったり、一緒に散歩したり、楽しい時間がもてた。丁度その直後、マルティーニ先生の75才の誕生祝賀会が弟子たちによって、カッセルの Wilhelmshöhe のホテルで盛大に催されたが、私も弟子の一人として招待してもらえたのは光栄であった。その帰途、先生ご夫妻の車に同乗させてもらいマールブルクに向かった。私たちはマールブルクでホテルに電話し、宿泊の予定であったが、先生ご夫妻のたつてのお勧めで、マールブルクの邸宅に4泊もさせて頂く結果となった。なお、ベルリン滞在中とその後、リーケン君の計らいにより以前の上司、同僚の勤めている三つの大学、病院で「日本の慢性肝疾患の疫学」と題して講演をする機会を設けてもらったが、その内容をマルティーニ先生に説明するよう求められた。75歳にもなられたのだから、もう厳しさはなくなっているだろうと思っていたが、内容について色々質問されたり、疑問を投げかけられたり、相変わらずの厳しさに冷や汗をかいた。帰国の日には、わざわざ先生のお車でフランクフルト空港まで送って頂き、大変恐縮したものである。

11年後、2002年に家内とベルリンを出発点として旧東ドイツを中心に旅し、途中、マールブルクに5日間滞在した。マールブルクでは、先輩ではあるが友人でもあるハルデビツヒ教授のお宅に泊めてもらったり、思い出深い時を過ごすことができた。その旅の最初の日、マルティーニ先生からお昼のお茶とレストランでの夕食を招待して頂いたが、先生は86才になり、体調も少しくずしておられることをお手紙で知っていたが、お見受けしたところお元気そうで、私たちも一安心した。その時、意外な、嬉しい贈り物を頂くことができた。それは私が最初の留学をしていた1967年8月にマールブルクに発生した原因不明の重症な感染症の臨床、基礎研究を集大成した著書である。この感染症はウガンダから送られてきたミドリザルを介して人に感染し、マールブルク大学内科が診療に全精力を費やした重症な感染症である。ワクチンや血清などを製造しているベーリングベルケ（ノーベル医学賞受賞者のマールブルク大学エミール・ベーリング教授が作った会社）の技術者などがミドリザルの血液などに接触して感染、発病したものである。結局、23人が発病し、5人が死亡するという当時としては死亡率の高い感染症であった。感染源がミドリザルであることは分かったが、病原体

は不明で、熱帯医学研究所などの協力もえながら、最後はマールブルク大学衛生学教室により新しいフィロウイルスが発見され、病気は「マールブルクウイルス病」と名付けられた。この臨床、その後続けられた基礎研究の成果をマルティーニ先生が纏められたのが「Marburg Virus Disease」という本である。この本は私が帰国してしばらく経って発刊されたもので、私が10年後、2回目の渡独をした時に知ったが、もう書店で求めることはできず、その後も出版社にメールで問い合わせたが手に入れることはできなかった。2002年の今回、マールブルクを訪れた時、先生の奥さんにこの本のことを雑談的に話したことがあったが、そのことを先生に話された結果だろうと思う。手元にあった貴重なこの本にサインと献呈の言葉を書いて頂き、私が泊めてもらっていた友人の家に届けて下さったのである。この本は私の宝物として、大切に保管してある。

なお、マールブルクウイルス病は現在、世界を震撼させているエボラ出血熱に9年先駆したアフリカに由来するフィロウイルスによる出血性感染症である。

話しは遡るが、1968年に帰国した後、大変お世話になったドイツでの恩師に、研究以外でも何か恩返しをすることはないだろうかと考えていた。ところが有難いことに帰国して4年目の1972年に小坂淳夫教授が会長となって第8回日本肝臓学会総会が岡山で開催されることになり、小坂先生のお心遣いだと思うが、マルティーニ先生を学会の特別講演者として招聘して頂くことになった。ご夫人共々ご招待したが、奥さんは当時、ギムナジウムの教師をしておられたので来日できなかったのは心残りであった。岡山の学会での特別講演は大変好評で、私も共に誇らしい思いをさせて頂いた。その際、熊本大学、京都府立医大、東京大学でも講演の機会を催して頂き、2週間、親しく先生のお供ができたのは身に余る光栄であり、思い出深い旅ともなった。マルティーニ先生にも喜んで頂いたし、多少の恩返しにはなったものと思う。

マールブルクで2002年にお会いして後、間もなく、ご夫妻とも体調をくずされ、仕方なく郷里のハンブルクの老人ホームに入られたことをお手紙で知らされた。

それから間もなく、2007年の12月に突然、先生の訃報が届き、言葉を失った。厳しい先生ではあったが、色々とお心遣いを頂いたことを思い出しながらご冥福を祈ることしかできなかった。

その後、2008年にドイツ・オーストリアの旅を計画し、何時ものようにマールブルクを出発点としたが、恩師もすでになく、令夫人も間もなく先生のあとを追うようにしてお亡くなりになり、友人も心筋梗塞のため入院しているとのこと、淋しい出発となってしまった。

思えば、見知らぬ若い一学徒からの一通の手紙に答えて頂き、快くマールブルクに迎えてもらって半世紀近くが経った。マルティーニ先生ご夫妻のお陰で、親しいドイツの友人をえることができたし、帰国してからは医師としての心豊かな生活を送れる原動力を頂くことができた。日本の恩師へと同じく、「ドイツの恩師」への感謝を忘れることはないだろう。

元国立岩国病院院長

〒703-8247 岡山市中区楳東町1-6-21

「ドイツ留学の思い出」

ー ドイツルネッサンス画家の巨匠達を訪ねてー

梶原博毅

はじめに

Humboldt 財団の奨学生としてドイツの地を踏んだのは1972年8月のこと、先ず、Bonnを訪れ Bonn 大学病理学研究所の Gedigk 教授に挨拶を済ませた後、Brillon の Goethe Institut で2ヶ月間のドイツ語研修を始めた。その時、夏休みを利用してドイツ語研修の目的で Goethe Institut にきていた東京芸術大学建築科在学中の A 君と、早稲田大学文学部在学中の B 君、C 君と仲良くなり、時々食事をともにしていた。

彼らの話を聞いていると、この Goethe Institut に来る前にイタリアのローマ、フィレンツェ、ベニス、ラヴェンナなどを旅行し、そこで経験したことをとても感動した様子で話していた。特に、建築物ではビザンチン様式、ロマネスク様式、ゴシック様式、ロココ様式など、また、絵画ではラヴェンナの中世モザイク画、フィレンツェやベニスのルネッサンス絵画などの素晴らしさを、熱気を帯びて話し合っていた。

彼らは、ドイツ絵画についても、ルネッサンス期の画家ステファン・ロッホナー、アルブレヒト・デューラー、マチアス・グリユネバルト、アルブレヒト・アルトドルファー、ホルバインらの巨匠のいること、彫刻家ではティルマン・リーメンシュナイダー、ファイトシュトスなどの名をあげていた。

ヨーロッパのことを何も知らなかった田舎者の私には、彼らの話すこと全てが新鮮で刺激的であり、この時からヨーロッパの歴史、特に音楽、絵画、彫刻、建築を中心とした文化の流れをたどって見たい欲望に駆られた。

1972年10月、2ヶ月間の語学研修を終え、ボン大学の研究室に落ち着いてから、私のヨーロッパ美術探訪が始まった。その第一歩としてドイツルネッサンス絵画の巨匠たちの作品を訪ねることとした。その際、高階秀爾著「西洋美術史」が大いに役立った。

1. ドイツルネッサンス初期の画家ステファン・ロッホナー (Stefan Lochner, 1400 ~ 1451)

ボンの隣町ケルンは、古代から栄えた大きな街で、神聖ローマ帝国の選帝侯の一人ケルン大司教がいた街であり、ヨーロッパ随一といわれるケルン大聖堂のあることでも有名である。この大聖堂のすぐ近くにヴァールラフ・リヒャルトツ美術館 (Wallraf-Richartz-Museum) があり、その中に有名なステファン・ロッホナーの「薔薇垣の聖女」が展示されている。彼はドイツルネッサンス初期の人で、若い頃フランドルを訪れ、ここを中心として発展した北方ルネッサンスの影響を受けているが、この絵を見ると、色彩といい、筆致といい、中世のおおいを残す素晴らしい絵であるであることが分かる。彼を含め、ケルンを中心に活躍した

画家をケルン派の画家という。

日本から恩師や友人が訪れると、隣町のケルンも案内し、ケルン大聖堂とともにヴァールラフ・リヒャルト美術館にお連れし、ステファン・ロッホナーの「薔薇垣の聖女」のある部屋に案内したものである。

2. アルブレヒト・デューラー (Albrecht Dürer, 1471 ~ 1528)

彼はドイツのダ・ビンチともいわれる博学の徒であり、ドイツ絵画史上最大の画家として知られている。ニュールンベルクの金細工師の子として生まれ、早くから画家としての才能を認められた。若い頃(1493年)、遍歴の途につき、当時有名なコルマールの版画家マルティン・シヨンガウアーを訪ねたが、彼はすでに亡くなっていたという。ニュールンベルクに帰って結婚し、間もなく単身でベネツィアに赴き、そこでジョバンニ・ベッリーニと出会い、多くのイタリアルネッサンスの画家及び絵画に接している。1495年、ニュールンベルクに帰郷し、多くの木版画や銅版画を制作し、ヨーロッパで一躍有名になった。その後、再びイタリアを訪れ(1505~1507)、ジョバンニ・ベッリーニと親交を結び、多くの絵画を残した。帰郷してからもラファエロ・サンティ、レオナルド・ダ・ヴィンチなどとも親交を図っている。



写真 1：デューラー自画像
(油彩画, 1500年)
(ミュンヘン、アルテピナコテーク)

彼は、絵画のみならず、天文学、数学、幾何学、人体解剖学、築城学(建築学)の知識も豊富で、レオナルド・ダ・ヴィンチの影響がうかがわれる。

彼には、3枚の有名な自画像のあることが知られており、その全てを見たいと思うようになった。最初の1枚は、22才頃の自画像で、ルーブル美術館にある。手にエリンギウムの花を持っており、ニュールンベルクの婚約者に送ったものといわれている。この絵は、留学2年目にパリを訪れ、ルーブル美術館を見学した際に見た。2枚目は、27才頃の自画像で、スペインの首都マドリッドのプラド美術館にある。3枚目は、28才頃の自画像で、自分をキリストに見立てた自画像とされており、ミュンヘンのアルテピナコテークにある(写真1)。

彼の絵画の中で、この3枚の自画像が最も好きな絵で、1枚目と3枚目の自画像は最初の留学の時に見た。しかし、3枚目は、1985年からの2度目のフンボルト奨学生留学の時に、スペインのバルセロナでヨーロッパ病理学会が開催され、その学会に出席した際、マドリッドに立ち寄り、プラド美術館を訪れ、念願の希望がかなえられた。

彼は、版画家としてもよく知られており、数多くの銅版画や木版画を残している。15世紀前半頃のドイツでは、版画はカルタなどの工芸品に利用されていたが、マルティン・シヨンガウアー(Martin Schongauer, 1430/50 ~ 1491)により芸術へと引き上げられ、デューラー

によって完成されたといわれる。

1974年11月、ボン大学における研究を終え、帰国の際、フンボルト財団の職員から連絡があり、この年、デューラー生誕400年祭を記念してベルリンの美術館に保管されているデューラーのオリジナルの銅版から出版した銅版画、木版画が購入できるとのことので、早速、ドイツ留学の記念に有名なメランコリアI（写真2）、騎士と死と悪魔、海の怪物、アダムとイヴなど十数枚を購入した。そのうちの何枚かは恩師や知人に献上したが、まだ数枚手元にあり額に入れて眺めている。



写真 2：メランコリアI
(1514年, 銅版画)

3. マチアス・グリユネバルト(Matthias Grünewald, 1470/1475～1528)

マチアス・グリユネバルトは、アルブレヒト・デューラーと並び称されるドイツルネッサンスの巨匠である。彼のこの名前は、通称であり本名ではないといわれている。

生年は明らかではないが、1470から1475頃ヴェルツブルク生まれと考えられている。彼の生涯に関しては断片的なことしか知られていないが、当時の芸術家は建築家を兼ねたものが多く、1511年、マインツ大司教治下のアシャッフエンブルク城の再建監督に任じられたことが知られている。

彼の代表的な絵画は、フランスのドイツ国境に近い、アルザス地方のコルマールにあるウンターリンデン美術館に収容されている「イーゼンハイムの祭壇画」である。

最初のドイツ留学の際には、彼のこの絵を見る機会に恵まれなかったが、2回目の留学の際、コルマールに行き、ウンターリンデン美術館を訪れてこの絵を見た。

祭壇画中央パネルに描かれた「十字架上のキリスト」を見たときには、キリストの像があまりにも凄惨に描かれており、陰鬱な気分になったことを思い出す。その右に描かれた「受胎告知」や「キリストの降誕」は鮮やかな色彩で描かれているが、それを見ても陰鬱な気分は晴れなかったことを思い出す。

この祭壇画は、コルマールの南方約20kmに位置するイーゼンハイムの聖アントニウス教会修道院附属施療院礼拝堂に設置されていたといわれている。

この教会修道院附属施療院における病人の苦痛を、十字架上のキリストの苦痛に置き換えて描いたものといわれる。

4. アルブレヒト・アルトドルファー (Albrecht Altdorfer, 1480頃～1538)

一方、ドイツルネッサンス初期の画家としてよく知られているのが、アルブレヒト・アルトドルファーである。彼はレーゲンスブルク生まれで、レーゲンスブルクに住み、当時のド

ナウ派と呼ばれる画家の中心人物として活躍した。彼の作品で最もよく知られているのは「アレクサンドロス大王の戦い」(1529) (ミュンヘン、アルテピナコテーク) である(写真3)。この絵を見たときの驚きは、いまもはっきりと思い出す。太陽の昇る瞬間の眩しいほどの輝き、空の青、膨大な数の兵士の群れなど、人間の技とは思えないほどの細部描写には、ただただ感動の至りでした。この絵は、バイエルン公ヴィルヘルム4世のために描いた歴史画である。彼は、画家であるとともに版画家でもあり、建築家でもあった。また、レーゲンスブルク市の参事会員などの要職にも就いていた。

学会などでミュンヘンに行くたびに、この絵とデューラーの絵を見るためにアルテピナコテークを訪れたものです。



写真3：アレクサンドロスの戦い
(油彩画, 1529年)
(ミュンヘン、アルテピナコテーク)

5. ハンス・ホルバイン(Hans Holbein der Jüngere, 1497/8 ~ 1543)

彼は、同名の父ホルバイン (Hans Holbein der Ältere, 1465頃~1524) の次男として南ドイツのアウクスブルクに生まれた。父や兄も美術史上に名を残す有名な画家である。彼は、若い頃に各地を遍歴し、スイスのバーゼルやルツェルンで活躍した。バーゼル市長の支援を受け、人文学者エラスムスやイギリスの政治家トマス・モアと知り合っている。彼はデューラーに次ぐルネッサンス的教養人で、画家としては肖像画家として有名であり、卓越した性格描写を發揮した。エラスムスの紹介でトマス・モアのいるロンドンに渡り、ヘンリー8世の宮廷画家となった。ロンドンでは、ヘンリー8世の肖像画を初め、多くの宮廷関係者の肖像画を作成している。彼の描いた肖像画はロンドンのナショナル・ギャラリーやルーブル美術館に多く見られる。

以上、今から40数年前のドイツ留学の頃に、感激しながら訪ね歩いたドイツルネッサンス画家の巨匠達について、その一部を思い出しながら書いてみた。定年退官後もドイツを訪れることがしばしばあったが、その度に美術館巡りをしながら昔の思い出を楽しんでいる。

広島県医師会腫瘍登録室 室長 (広島大学名誉教授)
〒733-8540 広島市西区観音本町1-1-1

第2次世界大戦を超えたドイツと日本の師弟愛

大 森 晋 爾

清水多栄先生〔写真1〕は1889年に東京で生まれました。京都大学医学部を卒業され同大学生化学教室で助手になりました。1920年ドイツの Freiburg 大学の O.H.Wieland 教授〔写真2〕の下に留学されました。帰国後1923年岡山医科大学生化学の教授になりました。1928年 Freiburg から München に移られた Wieland 先生のところに再び留学されました。清水先生は日本では各種の動物の胆汁酸の研究をされました。例えば“熊の胆”から新しい胆汁酸を発見されました。この胆汁酸は不朽の肝臓の名薬で今日でも薬として重宝されています。また何と言う努力でしょう、4千匹のヒキガエルから5リットルの胆汁を集められこの胆汁から新しい胆汁アルコールを発見されました。この物質はコレステロールから胆汁酸に向かう生合成過程の中間体であることが近年わかりました。また戦後先生は広島に県立医科大学（現広大医学部）を創設され1948年その初代学長になりました。1952年には第2代岡山大学学長になりました。先生は1957年まだ戦災復興中の München に向かわれ Wieland 先生を Stanberg 湖畔のお家に訪ねられました。その2ヶ月後の8月に Wieland 先生は80歳で亡くなりました。また清水先生も1958年公務で上京中、心筋梗塞により相次ぎ急逝されました。享年69歳でした。戦前 Wieland 先生は清水先生以外にも M. 小竹(阪大)、T. 星野(東工大)、K. 上代(日本医大)、S. 内野(名大)など多くの日本からの留学生を研究生として迎え入れられました。



写真1：清水多栄先生
(1889～1958)



写真2：Heinrich Wieland
(1877～1957)

Heinrich Wieland

1877年生まれ、München 大で1901年 Promovieren, 1905年 Habilitieren, 1917年 München Technische Hochschule の教授となり、1921年 Freiburg 大の化学研究所所長となり、1926年 München の化学研究所所長となりました。1927年胆汁酸と関連物質の研究でノーベル化学賞を授与されました。

さて Feodor Lynen〔写真3〕は1911年 München に生まれました。München 大学でWieland 教授の元で毒キノコの Phalloidin について研究しました。1937年 Promovieren し、



写真3：Feodor Lynen
(1911～1979)

1953年 München 大の理学部の生化学の教授になりました。翌年に München に新設の Max Planck の細胞化学研究所の所長とられました。ここで先生は国の内外から若い優秀な Post-Dok を育てました。沼教授（京都大）もその一人でした。沼は München 大では多忙な Lynen 教授を助けるべく講義を部分担当しました。帰国後は電気ウナギの発生機構を研究されていましたが若くして亡くられました。1972年 München オリンピックの年に München 郊外の Martinsried に当時の約1,000億円で Max Planck Institut für Biochemie が建設されました。この研究所は München の街中に有った生化学研究所、細胞化学研究所、たんぱく質と皮革研究所が統合されたもので、世界で広大さ、予算、陣容で世界屈指のものであります。何人かのノーベル賞受賞者が出ました。Lynen 教授はこの研究所所長でもありました。Lynen 教授は親日家で何度も訪日されました。1957年岡山に来られた時医学部で活性酢酸について講演されました。講演に先立ち清水先生が Lynen 先生を紹介され、Lynen 教授は間もなくノーベル賞を貰われるであろうと予言されました。

1964年 Lynen 教授は“コレステロールと脂肪酸生合成時の機構と制御”についてノーベル医学・生理学賞を受賞しました。Wieland 教授には三男一女の子供さんがおられました。長男ボルフガングは薬学博士で薬品会社 Boehringer Ing. 次男テオドールは Frankfurt 大の化学の教授、娘さんの Eva は Lynen 教授の奥様、三男オットーは München 大の教授でした。どなたも鬼籍に入られました。序ですが Lynen 教授のお嬢さん Anne Marie は父の研究室で生化学者となりました。三男オットーの息子フェリックスは Max Planck Insttitut für Biochemie の Lynen 先生のところへ Dr. になり後に Heiderberg 大の生化学の教授となり、更にその後ドイツ生化学及び分子生物学会の会長を務められました。よってフェリックスにとって親子3代続く学者となります。

ややこしい話で恐縮ですが以上でお解りの様に Wieland 先生は Lynen 先生の先生であり義父である事になります。親子がノーベル賞を受賞されることになりました。また Lynen 先生と清水先生は同門生となります。

私事ですが私の先生は水原舜爾先生です〔写真4〕。この先生は清水先生の後継者で患者の尿から多くの天然の新しいアミノ酸を発見されました。また Vitamin B₁ の作用機序の研究は有名で外国の生化学の教科書にその功績が記載されています。水原先生はまた仏教哲学者でもあり多くの著書が有ります（参照；生化学、81巻1、2009）。水原先生は Lynen 先生の友人でした。従って私は清水先生と Wieland 先生の孫弟子になります。さて私の留学の話となります。1964年頃アメリカの2つの研究室から年1万ドルで招聘されました。当時1ドルが360円の時代でしたから、破格の給料であったと記憶しています。私はこの額に惹かれました。やっと貧乏な研究室と家庭から一時的にしても別れることが出来ると思いました。しかし水原先生は遊びに行くのではなく勉強に行くのなら Lynen 先生のところに行けと指示されました。そこで Alexander von Humboldt に留学書類を提出しました。Humboldt に採用さ



写真4：水原舜爾先生
(1915～2009)

れMünchenに行くことになりました。1966年の夏 羽田⇨ Anchorage ⇨ 北極 ⇨ Copenhagen ⇨ München に生まれて初めて飛行機旅を経験しました遅れて来独の2才半の双子の息子と家内の航空運賃は100万円でした。奨学金は最初月額1,200マルクでした。(当時Polizeiは900DMでした) 最初 Rosenheimの近郊のGoethe Instsitut に入りました。中古の Käfer を買い生まれて初めて車の持ち主となりました。Goethe Instsitut にお世話になった時は北大、阪大、大阪府立大の先生方と仲良く楽しみました。秋になっていよいよMünchen のLynen 先生の研究室に行きました。MünchenはOlimpicの開催を前にしてどこもかしこも工事中で道路は掘り返され、交通は変則状態となり、外国人工事関係者が溢れていました。その為Wohnungsproblemがあり借家探しには苦勞をしました。München での研究室に於いては、研究方法は勿論のこと、思考法を得、多くの若い良き友人をと知り合いとなりました。一旦街に出れば歌劇にしろ、音楽にしろ本物を安価に体験する事ができました。一寸郊外に行けば素晴らしい Bayern の風景を堪能できました。休みにはKäferで家族とヨーロッパの旅をしました。願書提出時に水原先生のご指示通りドイツ行きを実行して、その結果お金には替えられない大変な収穫・経験をえました。この様に先生なる人は寡黙であっても弟子の将来を決める発言が必要となります。

私の研究室から数人の若い研究者を Lynen 先生のお弟子さんであり同時に私の友人の所に Alexander von Humboldt 奨学研究生や Max Planck 奨学研究生として送り、お世話になりました。考えてみれば Wieland 先生のドイツのひ孫弟子の研究室に Wieland 先生の日本のひ孫弟子が勉強に行った事になります。以上長々と面倒なお話を書き読者の方々に退屈させたと思いますが、言いたいことは第一次世界大戦の後から第二次世界大戦の困難な時代を越えて先生と弟子の消えることのない師弟愛ロマンの物語を伝えたかったのです。今頃の若い研究者は上記の様なドロドロとした人間関係を大切に思わないし好みで無いのですが、私は上記の様な師弟愛がこんなに長く続くことは素晴らしいと思います。師弟愛とは先生は弟子を育てようとし、弟子は先生に感謝し、顔を汚すことのないように努力しようとする行為だと思います。

最後に、ついでですが H. Wieland 先生の先生は Adolf von Baeyer (1835~1917) であり Baeyer の先生は Justus von Liebig (1803~1873) でした。世界中の化学者の親元を辿れば Liebig に辿り来ると言われています。München 大学の理学部には講義室に Baeyer 講堂と Liebig 講堂があります。München の中心の Maximilians-Platz にはLiebigの友人で衛生学の元祖である Pettenkofer 像と並んで大きな立派な Liebig の像が建っています。

およそ自分の領域の化学、有機化学、生化学等の学問分野は一種の徒弟制度で、刀鍛冶の様なもので実験方法は本に書いてなくて先生から弟子に教えて貰うことが多いのでこの様な師弟関係が生まれるのではないのでしょうか。どんな秀才でも最初から一人で良い研究は生まれれないと思います。

岡山大学名誉教授 (薬学部)
津山工業高等専門学校名誉教授 (校長)
〒703-8207 岡山市中区祇園14-5



Alexander von Humboldt

中国・四国会員による寄稿集

発行日 平成 27 年 4 月

発 行 Alexander von Humboldt 中国・四国支部

編 集 大森晋爾

〒 703-8207 岡山市中区祇園 14-5

E-mail : ohmori_shinji@yahoo.co.jp

印刷所 土師印刷工芸株式会社

日本 Alexander von Humboldt 協会

事務局 関 映子

〒 707-0052 東京都港区赤坂 7-5-56

TEL & FAX 03-3582-6080

E-mail : alumni@daadjp.com

